

未来創造志塾14期第5回(2015年7月13日)

帝王学、NO2・参謀学を学ぶ

第4回のテーマ「韓非子①」帝王学

未来創造志塾 建塾の志

目的

二十一世紀、新しい時代の大転換期を生き抜くための理念や経営の哲学を共に学び合う。
経世済民の高い志を持ち、日本人としての使命を探究し、切磋琢磨し合い、未来に向けての価値を創造し、共感の和を広げる。

誓い

一、大局観察

何事も高所、大局から、情勢判断する習慣を心掛けます。

一、使命探究

人間の持つ無限の可能性を信じ、自らの使命を探求し、価値の創造に努めます。

一、自己挑戦

常に智慧と向上心と勇気を忘れず、共に励ましあい、立派な日本人となることを目指します。

未来創造志塾、第14期

会費(年)	今回14期はオープン参加(経営者とNO2 役・参謀候補生・経営幹部)	
2万円(一人)	未来創造志塾14期 講義10回分	2時間30分
会場	東陽町産業会館を予定しております。	

第14期は、東洋哲学・思想関連著書をテキストにして、対話形式で講義

ビジネスの本質と価値観、経営戦略と人間学を学びながら、具体的な実践に繋がります。

第14期予定 「帝王学・NO2・参謀学」			テーマ
第1回	3月9日(月)	第1回	孫子①理念
第2回	4月13日(月)	第2回	孫子②戦略
第3回	5月11日(月)	第3回	孫子③戦略
第4回	6月15日(月)	第4回	孫子④人事統率
第5回	7月13日(月)	第5回	韓非子①帝王学
第6回	8月10日(月)	第6回	韓非子②帝王学
第7回	9月14日(月)	第7回	韓非子③統率力
第8回	10月19日(月)	第8回	貞観政要①参謀学・帝王学
第9回	11月9日(月)	第9回	ドラッカー①トップリーダー論
第10回	12月14日(月)	最終回	ドラッカー②リーダーシップ・参謀
検証	1月18日(月)	振り返り	振り返り・プレゼンテーション

場所 : 江東区産業会館 会議室(地下鉄東西線東陽町駅) 予定

時間 原則第2月曜日、午後6時30分～午後9時

年会費 : 2万円/1人(1年間10回分) 講義の録音 CD 送付(都度参加の場合は3000円/1回)

14期第5回 テーマ「韓非子①」人を動かす帝王学を学ぶ！

参考テキスト: 人を動かす「韓非子」の帝王学 中島孝志 太陽企画出版(1500円)

儒家

孔子(前551～前479)

「子曰く、性は相い近し。習い、相い遠し。」

「子曰く、唯だ上知と下愚とは、移らず。」

孟子(前372～前289) 性善説・・・忍びざるの心(恕)

荀子(前298～前235) 性悪説・・・人の生まれつきの性は、悪である。

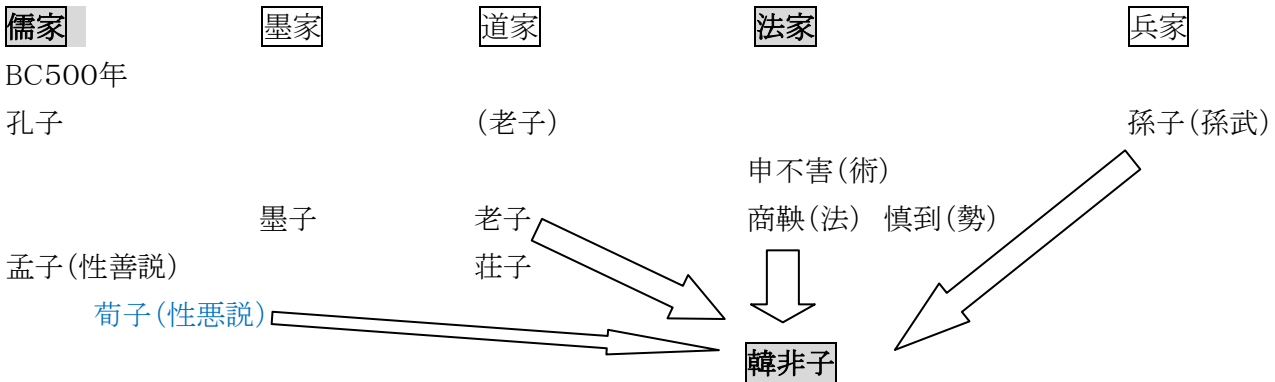
善というのは、後天的、人為的なものである。

人間の本性は、生まれつき利を好むもの。

韓非子(前283～前233) 性悪説・・・人は利で動く(刑と徳)

社会の安定秩序 ⇨⇨⇨ 善なる人格の形成 ⇨⇨⇨ 教化 ⇨⇨⇨ 性善or性悪
⇨⇨⇨ 秩序腐乱の防止 ⇨⇨⇨ 刑罰(韓非子)

「韓非子」は、どんな思想家の影響を受けたのか？



BC221 秦の始皇帝の中国統一

統合思想に学ぶ実践人間学・・・現代の経営にいかに関活用するか？

性善説か性悪説か？

日本・・・性善説

欧米・・・性悪説 では・・・中国は？

性善説	性悪説
孔子(論語)・・・儒教	韓非子・・・法家
仁(徳) 修己治人 徳治主義	利(法と術) 刑名参同 法治主義

韓非子の思想の出発点は人の性は何かということから始まる。

「夫れ智は性なり。寿は命なり。性と命は、人より学ぶところに非ざるなり」頭学

人は利で動く

人は己の利益を求めて行動する。己にとってプラスになるもの、無意識のうちに計算し、行動する。

利を求める人間の本性をあるがままの現実(善?悪?言っていない)

打算にもとづく親子関係・君臣関係・男女の関係

「人主の患は、人を信ずるにあり。人を信ずれば則ち人に制せられる」備内……人間不信

人が好意や思いやりをもってこちらのために何かをしてくれることを期待するのは、危険だ。

確実なことはこちらのためにせざるをえないようにもっていくことだ。

だから聡明な君主は、何が得で何が損なのかをはっきり天下に示すのだ。

刑と徳(法治主義)

仁義(主観)ではなく、法・刑罰といった客観的基準、普遍性を信に置くべきとした。

法と刑罰、恩賞……「賞と罰がきちんと対応すれば、何の心配もない」用人

「明主の法は、はかりなり」六反

「名君は法によって官僚を登用し、自分の恣意で登用することはしない。法によって功をはかり、自らの恣意ではかることはしない」有度

法令を立てる理由は「私」を廃するためである。「私」なるものは、法を乱すものである。詭使

賢者や智者の出現をあてにするには間違い。

名君は偶然にたよらない。必然のやり方を採用する。……韓非子は平均人をもとにしてすべてを考える

刑罰の目的

① 応報

② 予防・抑止……韓非子の目的「刑を以って刑を去る」⇒⇒重刑主義

③ 教育・更正

世の中の難しいことは、必ずや簡単なものから起こる。天下の大事は、必ず些事から起こる。

「大は必ず小より起こる」「天下の大事は、些事から起る」喻老篇……それを賢明、聡明という。

法の運用は、度量衡、機械的、客観的、君主の人為を越えて系統的に無為に自然に限りなく近く。

「最上の君主は、その存在を下々が知っているだけのもの」最上の君主のもとでの民は、悦ぶことなどない。

刑罰の目的は、唯一、犯罪の予防にあり。

民を活かそうとして混乱を招くよりも、民は死んでも安定秩序が保てる方がました。

政治とは？

民に恩恵を施す政治(儒家の政治)は、間違っている。

……功績のない者に恩賞を与え、罪を犯した者を免除することにほかならない。

政治は人の嫌がることをあえて断行せねばならないこともある。

……相手の立場を勘案し、相手が欲しくないことを理解することは事柄の決断と実行を妨げる。

⇒⇒⇒決断できない優柔不断な主宰者は失格、亡国の原因をつくる。

何故、世の中が良くならないのか。成長しないのか。学習を途中でやめるのか。

絶対多数に立脚する現実的な思考は、質的な現実主義につながる。

「質」とは人間の「資質」「能力」であるが、少数である。

絶対多数は理性的判断をおこなわず、本能的に功利へと、打算へと向かう。

善悪の判断とは別にその絶対多数の現実を認め、そこから効果的対応を考えなければならない。それが現実。

人は利で動く(韓非子:備内編)134p

⇒人間を動かしている動機は何か？

名誉でもない、正義でもない、ただ一つ利益である！と韓非子は言う。

忠誠を当てにするな(韓非子:外儲説編)164p

⇒臣下が背かないことに期待をかけるな。背こうにも背けない態勢をつくれ。

そこで必要になるのが「術」である

① ごまかしを許さない厳格な勤務評定

② 賞罰の権限をみずから行使する

⇒権力の要をしっかり握り、黙って睨みを利かせる

上下、一日に百戦す(韓非子:揚権編)112p

⇒組織内部にも戦いがある

君主と臣下は、使う者と使われる者は根本的に利害を異にしている

だから、君主たるもの賞罰の権限をしっかり握って、厳しく臣下を統制しなければならない

「下はその私を匿して用ってその上を試み、上はその度量を操って以ってその下を割く」

臣下は本音を隠して君主の出方を見守っているし、君主は基準をつくって臣下のかばい合いに楔を

臣下に権限を貸し与えてはならない。的に斧を貸すようなもの、相手が襲いかかってくる。

論語

「君子は和して同せず、小人は同して和せず」(子路編)82p

⇒「和」とは自分をしっかり持った上で周りの人たちと仲良くすること

⇒「同」とは自分を持たないで、ただ付和雷同すること

学びて時にこれを習う、また説ばしからずや。

⇒「時」その礼を実習するにふさわしい時

⇒「説」神に祈り、神意が我が身に降臨する忘我の状態(天命・感じる・知識と経験の統合)

朋あり遠方より来る、また楽しからずや、人知らずして慍みず、また君子ならずや(学而編)

⇒朋、遠方より来る「有り」・・・心の通い合う友を持ちたい！

⇒思いがけない遠方から思いがけない人がやってきた、話してみて「志」を同じくする人だとわかった

その「人」に私をわかって欲しい！わかってくれなくても、ムッと来ないのが君子だ！

巧言令色、鮮なし仁(学而編)28p

⇒言葉を飾り、顔色をやわらげて相手に媚びるのは、仁とはほど遠い

⇒「仁」人間愛・・・相手の気持ちや立場になって考えてやる思いやりの心

14期5回 参考資料

未来創造志塾 5期第1回(2006年3月20日)

「荀子」人生で学ぶべきこと、リーダーシップとは？

儒家

孔子(前551～前479)

子曰く、性は相い近し。習い、相い遠し。

子曰く、唯だ上知と下愚とは、移らず。

孟子(前372～前289)性善説・・・忍びざるの心(恕)

荀子(前298～前235)性悪説・・・人の生まれつきの性は、悪である。

善というのは、後天的、人為的なものである。

人間の本性は、生まれつき利を好むもの。

社会の安定秩序⇒⇒⇒善なる人格の形成⇒⇒⇒**教化**⇒⇒⇒性善or性悪

荀子の生きていた時代(紀元前4世紀)は、春秋の末期であり、当時の政治は腐敗しきっていた。次から次に国が滅び、暴君が生まれた。かれらは本来の道を忘れて占いに凝り、俗物儒者などが蔓延り、人々を惑わせていた。かくて、儒家、墨家、道家の実績と歩みを振り返り、系統的に纏め上げた。

荀子は孟子より60～70年遅れて生まれたようだ。ことごとく対照的な二人である。儒家という一つの土俵で見た場合、孟子が儒家の理想的、感情的な面を代表しているのに対して、荀子は儒家の知的、実践的な面を代表していると言えます。

人間の本性を善と見るか悪と見るか、人間の相反する側面の一方を出発点とする議論の違いは、二人の性格、生き方の違いであろう。孟子は理想主義。**荀子は現実主義だった。現実批判から知的、実践的に論理的、合理的な考えが特徴である。**

性悪説は、荀子の思想の基幹をなすものである。

人はだれでも、利益を追い、快樂を求めようとする側面を持っている、現実社会が秩序を失い、人々が苦痛をかみしめているのは、この側面ばかりが成長したからだ、と主張した。

孟子のいう天性は心を意味し、善悪は道徳的な価値を意味した。

荀子のいう天性は**欲望**を意味し、善悪は**社会秩序の治乱**を意味した。

人間の天性は悪だが、後天的努力、つまり、人為を積み重ねることによって矯正できる。

天性を矯正する能力は、どんな人にも平等にある。

その能力を十分に発揮さえすれば、いかなる凡人でも聖人になれる。かれはそう考えた。

天性に外から手を加えること、それは教育である。

当然、荀子は教育を重視した。

では、努力といっても、何に向かって努力すればいいのか？

それは、礼・義の実践に努めるのだ、と荀子は言う。

礼・義は人間がしたがう最高の規範であり、人を教化する手段であった。

孔子は仁を強調し、孟子は仁・義を強調した。それらは全て人間の内面に発する要素であり、天命に通じるものであった。それに対して、荀子の礼・義は**外圧的な規定**である。

人間の集団生活を円滑にするために外圧的な規定によって性情の赴く方向を変えようというのだ。

つまりは、礼・義の意味は、ほとんど**法律に近い**。

「人の性は悪、その善なるは偽なり」

利益・・・自分勝手・・・争い

憎む・・・裏切り

感情・・・感覚的充足・・・社会規範(礼・義)・・・教化

「意思と努力が凡人を聖人にもする」

仁・義・礼・法を理解する素質と実践する条件は誰にでもある。

可能性があるということは、実際にそうであることと同じではない。

勸学(学問のすすめ)

出藍の誉れ:弟子が師よりもすぐれること

「青は、これを藍より取りて、しかも藍より青し。氷は、水これをなして、しかも水より寒し」

学問は途中でやめてはならない。⇒⇒⇒無限の可能性

どんなものでも外から手を加えれば、本来の姿を変えることが出来る。後天的努力の必要性。

「蓬も麻中に生ずれば、扶けずして直く、白沙も泥に在らば、これとともに黒し」

いつかわたしは、一日中瞑想にふけたことがあった。ところがその結果は、ほんのしばらく学問したときにも及ばなかった。遠くを見ようとして、精一杯背伸びしたことがあるが、その結果は、高所から眺めるのに及ばなかった。君子だとて先天的に優れているわけでない。物の利用のしかたが巧みなのである。

⇒⇒⇒人間は環境の生き物

「塵もつもって山になる」「千里の道も、」

目に見えぬ努力を積み重ねないものには、榮譽がおとずれるはずがないし、目につかぬところで仕事の手を抜くものでは、輝かしい成果があがるはずがない。

「善行は必ずだれかが知っている」

善行につとめるからには、それを積み上げねばならぬ。積み上げてさえゆけば、必ず世に知られるはずだ。

「学はその人に近づくより便なるはなし」

優れた指導者につくことが肝腎である。礼や楽には規則が述べてあるだけで説明がない。詩や書には昔のことが書いてあるだけで、今日の問題性から遠い。春秋は序述が簡潔すぎて理解しにくい。

学問向上の一番の早道は、傾倒できる指導者にめぐりあうことである。次は礼を中心におくことである。傾倒できる指導者がなく、といって礼の尊重もやらぬと、結果は知識を雑説に求めるようになる。

くだらない質問には答えぬがよい。

ろくな答えができぬものには、問いかけぬがよい。

くだらない話には耳をかさぬがよい。

あげ足をとるような相手とは議論せぬがよい。

道をふんで訪れるものとだけ交際して、礼儀しらずは相手にせぬことだ。

態度が恭しい相手とだけ、求道の方法を語りあうがよい。言葉が穏やかな相手とだけ、道の道理を語り合うがよい。なごやかな表情の相手とだけ、道の極致を語り合うがよい。

相手にすべきでないものと議論するのはオシャベリである。議論すべき人とも議論しないのはダンマリである。相手の気持ちにお構いなしに語るのはヤミクモである。それらはみな正しい。

「人物を見きわめて対処すること」

政治はいかにあるべきか。私の考えを述べよう。

有能な人材は、序列にこだわらずどんどん抜擢する。無能な者は、さっさとクビにする。手の施しようのない悪人は、いくら教育しても無駄だから、死刑に処する。けれども一般人民は、刑罰を加える前に、教化につとめるべきだ。相手の能力が見きわめがつかぬ間は、序列を基準にしておけばよい。

⇒⇒⇒得手に帆をあげて(本田宗一郎)

得意分野で働け。楽しみながら働け。

「農は田に精しくも以って田師となすべからず」

農家のプロといわれる人といえども、農業管理者に適しているとはいえない。

⇒⇒⇒リーダーとは一人一人の能力を最大限に引き出し、それを少なくとも足し算、願わくは掛け算にして当初の目的を達成する人のことだ。

「平等は不平等の中にある」

「分」というものがなければ、権力は集中しない。上と下とで権力に差をつけなければ、国家は統一できない。すべてのひとが平等であっては、人が人を使うことができなくなる。天と地が分かれているように、人間には階級区分があるのが自然なのだ。

⇒⇒⇒人間は平等で、その努力次第でいかようにも偉くなれる。拒否して乞食にもなれる。使う人と使われる人がいる。しかし人格は平等に尊ぶ。

「君主は舟で民は水。浮くも沈むも水次第」

君主の心得る3要点

1. 君主たるもの地位の安定を望むならば、何より政治を公平に行い、人民を愛することが大切。
2. 国家の繁栄を望むならば、礼を尊重して、すぐれた人物に敬意をはらうことが大切。
3. 功名をあげようと望むならば、賢者を登用し、有能な人物に仕事をやらせることが大切。

⇒⇒⇒使う者は使われる者の信頼があつてこそ、その地位に留まることができる。

大事を誤らず、小事も間違えないのが、最上の君主だ。(大事は軽く、小事は重く)

小事を大切にすることは、使われる者の心をわかることが根底にある。

「分はなぜ必要か」

万物はそれぞれ形成を異にする。利用価値は一様でないにしてもそれぞれが人間に役立っている。みずから信じるところがあるのは、知者も愚者も変わらない。

何を正しいと信じるかで、知者と愚者が分かれる。かりに力が等しくても、人には愚者と知者があるのだ。

すべての弊害は、欲望を放任することからおこる。

分がなければ争いがおこる。

その悩みを除くには、「分」を明確にしたうえで、集団生活をいとなむほかはない。

⇒⇒⇒リーダーの責任を覚悟できる人間こそが、リーダーの資質。責任は2～3倍。

「分」をわきまえた人間こそリーダーの資質。

「君主は徳をもってし、小人は力をもってす。力は徳の役なり」

⇒⇒⇒人間の尊厳は志にある。

道・・・大欲・・・小欲・・・物欲(損得)・・・不安・恐怖

「賞罰の効用」

褒章がなぜ効果的だったかといえば、人民に自分の努力次第で望みがかなうのだと悟らせたからだ。

刑罰がなぜ効果的だったかといえば、人民に悪事を働けば恐ろしい目にあうのだと悟らせたからだ。

「すなおとへつらいの違い」

「認められないのはなぜか」

仕える相手に認められないのは、自分が怠けているからだ。

怠けず一所懸命に働いているのに認められないとしたら、仕える相手を尊敬していないからだ。

尊敬しているのに認められないとしたら、成績があがらないからだ。

成績をあげているのに、それでも認められないとしたら、それは自分に徳がないからである。

徳がない人間は、せっかくの苦勞がみんな水の泡になってしまうのだ。

「一曲に覆われて、大理に闇し」

片寄った理論に支配されると、天下の公理がわからなくなる。

⇒⇒⇒決断力は今を知ること。

最後の決断はすべて社長一人。孤独——人間の原理原則を知る。

「迷える者は路を問わず」

道理を見失っている人間は自分の意にまかせて事を処理してしまい、賢者に相談しようとしなない。

「千歳を觀んと欲すれば、則ち今日をつまびらかにせよ」

「利を見て其の害を顧みざること無かれ」

⇒⇒⇒先見力は今日のことを知ること

情報は損と得がある。

決断力

「賞罰では人を統治できない」統率力と決断力

「聞かざるは聞くにしかず、聞くは見るにしかず、見るは知るにしかず、知るは行なうにしかず。学は行なうに至りて止む。行なわば明らかなり」

⇒⇒⇒学問は実践してわかってはじめて意味がある

「人事を尽くせ、天事をおかすな」

⇒⇒⇒人間の能力の可能性を信じ、天に頼るな